平成10年9月22日第3種郵便物認可　平成22年4月30日発行　偶数月末発行　Vol. 59, No. 2　2010. 4. 30　ISSN　1345－7624

JOURNAL OF THE TOKYO HOSPITAL PHARMACISTS ASSOCIATION

東京都病院薬剤師会雑誌

Vol. 59, No. 2　2010. 4. 30.

総　説
　新たに発売された子宮頸がん
　　予防ワクチンについて
充実した実務実習を支援する
　「実務実習指導・管理システム」
メーリングリストを活用しよう
シリーズ
　そこが知りたい！医薬情報
　　ベンゾジアゼピン系薬剤の奇異反応
　　インクレチンとインクレチン関連薬
　Q＆A医薬情報部会
　　クロピドグレルとオメプラゾールとの
　　相互作用について
　　デュロキセチンの未承認用法について
　臨床業務や情報収集に役立つ
　　ホームページの紹介について
　　第4回　医薬ニュース、その他の情報
会員報告
　多摩薬薬連携協議会フォーラムに参加して

Published by the Tokyo Hospital Pharmacists Association.
Nagai-Kinenkan, 12-15, Shibuya, 2-chome, Shibuya-ku, Tokyo, Japan.

【会員報告】

多摩薬薬連携協議会フォーラムに参加して

医療法人永寿会恩方病院薬剤部
川　浦　敬　子

2009年11月18日18時30分より八王子市学園都市センターにて開催された第12回多摩薬薬連携協議会フォーラム「OTC薬新時代と薬剤師」に参加しましたので報告します。

初めに，東京医科大学八王子医療センター薬剤部長の奥山清先生より開会のご挨拶があり，OTC薬がどのように変わったかのご説明，さらに「OTC薬について病院薬剤師と薬局薬剤師がどの様に関わっていくのかを一緒に考えてみましょう」ということで始まりました。

続いて，昭和大学薬学部佐々木圭子先生による「薬事法改正は国民に何をもたらすか～薬剤師の出番？　OTC薬を含めて」と題した特別講演が始まりました。海外ではOTC薬についての研究が進んでいるが，日本ではそのような研究が少なく販売環境の整備もまだ遅れているのではないかといった説明がありました。

講演は①改正薬事法のポイント（一般用医薬品関連）②一般用医薬品における「リスク」とは……③消費者は何を望んでいるのか？④今，薬剤師は何をすれば良いのか……の４つのポイントに分けて説明がありました。

改正薬事法によりもたらされたものとして，リスク分類，対面販売，情報提供の義務化や登録販売者制度などが挙げられました。登録販売者は一般用医薬品のうち第２類と第３類医薬品を扱うことができます。薬局で扱えるものがカテゴリーで規定されたことも今回の改正のポイントです。

また，一般用医薬品の販売方法は対面で行うことが原則であり，生活者が安全に適切にクスリを利用できるように専門家のアドバイスとサポートが求められており，「医薬品のリスクの程度に応じた外箱表示」，「医薬品のリスク分類ごとに分けた陳列」，「薬剤師，登録販売者，その他の従業員の違いが分かるよう名札等で区別」などが一般用医薬品の情報提供として求められているとの説明がありました。

また，首都圏在住の50～69歳の一般男女で２～３年以内に「かぜ薬」購入経験のある方に行ったweb調査の結果が報告されました。

【薬局・薬店，ドラッグストアなどでかぜ薬を購入する際，店内にいる薬剤師に相談したことがあ

司会　奥山清先生

特別講演　佐々木圭子先生

パネルディスカッション

座長　下平秀夫先生

るか】という質問では，「したことがある」もしくは「したことがあるが薬剤師か分からない」と答えた人が全体の62.2%であり，聞かれる頻度が高い項目としては「どんな症状か」が最も多く84.2%，「何か他に病気はないか」が21.3%，「今までにかかったことのある病気は何か」が12.3%であり，リスクマネージメントに関する項目があまり聞かれていないという結果が報告されました。

【「かぜ薬」購入時，薬剤師への相談希望】については，「できたら薬剤師に相談したいと思っている」が58.8%，「薬剤師である必要はないが誰かに相談したいと思っている」が16.4%，「特に誰にも相談したいとは思っていない」が24.8%でした。

薬局薬剤師に相談する必要がないと思っている理由として，「いつも同じ薬を飲んでいるので相談する必要がない」が最も多く39.3%，その他に「薬剤師の多くが相談相手として不充分と感じている」が13.6%といった結果でした。

【「かぜ薬」選択時，気をつけていること】という質問では，「自分の症状のみに効く薬を選ぶようにしている」が最も多く54.6%でした。その他の理由として「自分の症状だけでなくかぜの他症状にも効く薬を選ぶようにしている」が36.4%，「一応飲んでおく」ということで選んでいる人が多い，また，70歳代で同じ調査を実施すると，飲んでいれば安心という傾向はより高くみられるといった説明がありました。

【「かぜ薬」選択時に困っていること】という質問では，「商品ごとの違いがわかりにくい」が最も多く49.4%，次いで「箱をあけないと，細かい注意書きが読めない」が34.2%，その他「外箱だけで服用してはいけない人等に該当するかわからない」が21.0%といった結果でした。

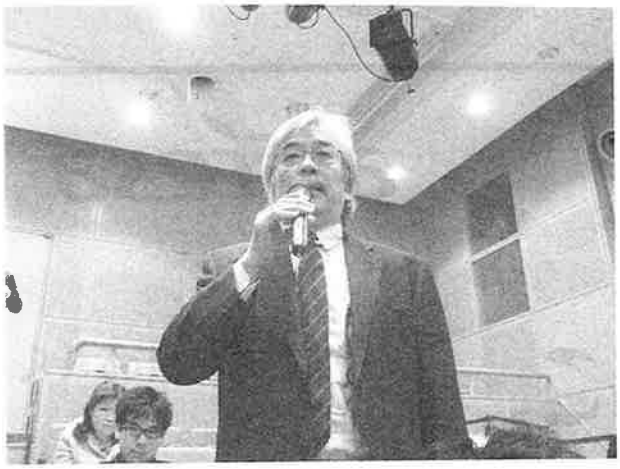
【「禁忌，慎重投与」に該当するか確認しているか】という質問では，「必ず確認している」が39.2%，「時々確認しないことがある」が37.8%，「確認はしていない」が23%となっており，確認していない理由としては「今まで服用して特に問題がなかったから」という理由が最も多く59.2%の結果でした。「いつも同じだから安心」や「OTC薬だから安心」と，リスクについての認識が低い傾向がうかがえるという説明がありました。

【市販の風邪薬の中には，「前立腺肥大症」を悪化させるような副作用があるということを知っているか】という質問では75.6%の人が全く知らないという結果でした。

【かぜ薬飲用時「前立腺肥大症」出現・悪化経験があるか】という質問では，全体の６%の人が出現，悪化また尿が出なくなった経験があるという結果でした。

また，第２類医薬品に分類される指定第２類医薬品のジフェンヒドラミンについて調査したところ，消費者は睡眠改善薬と睡眠薬を混同している傾向があるということでした。薬剤師の関わり方として，消費者の睡眠に問題がないか確認し対策のアドバイスを行うことや長期に服用しないように説明すること，翌日の残眠への注意を促すことが挙げられると説明がありました。

今，薬剤師に求められていることとして，「リスク区分によって情報量を変えるのではなく，患者の背景に合わせた情報提供を行うこと」，「セル



会場から活発な質問

多摩薬薬連携協議会会長　茂木 徹 先生

フメディケーションに対する顧客の教育」,「見やすい外箱情報など,患者自ら判断できる環境作り」,「適正なリスク分類のためのエビデンスの蓄積」を挙げられました。

続いて帝京大学薬学部の下平秀夫先生を座長に,青梅市立総合病院薬剤部の田中三広先生,ノムラ薬局の野村圭伊先生,佐々木圭子先生,中屋薬局の池嶋謙先生をシンポジストに迎えて「OTC薬における薬剤師の役割」をテーマにしたパネルディスカッションが行われました。

改正薬事法が施行された当初はマスコミの影響もあり,その内容の説明を薬剤師に求める人が多く,対応に苦慮したそうです。新たに設置された登録販売者との間に攻防はなく,協力して業務を円滑に行っているということでした。

また「薬剤師は副作用ばかりが気になってOTC薬の面白さが分かっていない。薬剤師は薬の番人だけではなく案内人になるべきであり,感謝される場面が増えたと捉えて前向きに取り組む必要がある」という意見もありました。会場からも意見が挙がり,「セルフメディケーションサポート薬局として第1類医薬品を増やしている薬局が多く,またOTC薬を扱っている薬局の方が伸びている」という意見もありました。その他,「周りの開業医がどのような専門なのかを知ることも薬局の武器になる」,「OTC薬による副作用が報告されていることを知るべきだ」という意見も挙がっていました。

活発な意見交換の後,多摩薬薬連携協議会会長の茂木徹先生より閉会の辞があり,第12回多摩薬薬連携協議会フォーラムは終了しました。

今回のフォーラムでは,薬事法が改正されたことによりOTC薬の取り扱いがどの様に変わったのか,また,それに対して薬剤師がどの様に取り組んでいかなくてはいけないのか,とても勉強になりました。私は病院薬剤師であるため直接OTC薬の販売に携わっている訳ではありませんが,今後薬剤師によるセルフメディケーションの支援が進めば,入院前にOTC薬を服用していたり,入院時にOTC薬を持参する患者さんも増えてくるのではないかと思いました。薬局薬剤師の先生方がどの様にOTC薬を取り扱っているのかを知ることも必要なのではないかと感じました。

今回学んだことを今後の業務に活かしていきたいと思います。